

〔論 説〕

動画ベースの異文化交流プロジェクト

山 内 真 理

1. はじめに

Skype の通話サービス開始から 10 年以上が経ち、学校間交流や協同学習、個人での言語交換 (Language Exchange)、語学のプライベートレッスンなど、教育や学習におけるビデオ通話機能の活用が広まっている⁽¹⁾。異文化交流におけるビデオ通話活用の大きな利点として、映像付き同時コミュニケーションにより、パラ言語・非言語情報を含む、臨場感ある伝達が可能になることがあげられる。こうした言語化していない、あるいは言語力不足のために適切に言語化できない情報も伝わることで、言語の壁を超えて、好奇心をかきたてる印象深いコミュニケーション活動が可能になる。筆者の以前のオンライン異文化交流の試み (2012 年～2015 年) では、様々な活動の中で、Skype を用いた同期型コミュニケーションが常に最も好評であった⁽²⁾。

しかし、その一方で、同時コミュニケーションという形態は、発話のための準備時間や相手の発言を処理する時間がとりにくく、言語力に自信のない参加者にとっては障壁にもなる。カメラに向かって話すことに抵抗を感じる者であれば、壁はさらに高くなる。このメリットとデメリットの両方を示す例として、以前行った交流後の振り返りを紹介しておく。なお、主に日本語を用いた交流であり、「言語力に自信がない」という要素は含まれない。

文字で「自己」紹介してみて、正直言うと恥ずかしくないもので、言いたいことは言えました。スカイプだとカメラがあり恥ずかしくてあまり言いたいことが言えなかった。でも直接話した方が印象に残り、コミュニケーションをとっている感じがした。だから何回もやってなれてくれば、恥ずかしさはなくなるから、文字のいいところも含まれるからスカイプでやり取りがいいと思う⁽³⁾。

このように、抵抗感を見せる参加者でも、慣れていくにつれ、ビデオ通話のメリットが効いてくるのは確かである。が、授業に交流を組み入れる際、このような学生の抵抗感が薄れる頃には予定の交流期間が終わってしまう、といったことが起こるようでは困る。また、授業内でビデオ通話を利用したい場合、時差が大きすぎると、そもそも同時コミュニケーションは実施することができない。

(1) Godwin-Jones (2013)

(2) Yamauchi (2017)

(3) 山内 (2014)

映像付きコミュニケーションの利点を活かしつつ、同時コミュニケーションの難点を避けるために、2017年度の交流プロジェクトでは、それぞれのサイドで撮影した動画を共有し、それをベースにやりとりを行うという映像付き非同時コミュニケーションの形をとることにした。

以下ではまず、動画共有をベースとした日米異文化交流プロジェクトの概要を紹介し、プロジェクト前後の参加者の意識の変化と、プロジェクトについての事後アンケートをもとに、特に英語習熟度の低い学習者にとってのメリットを論じていく。

2. 2017年度の交流プロジェクト概要

2017年秋学期、10月から12月の初めにかけて、千葉商科大学(CUC)の「異文化コミュニケーション」ゼミの2年生と、バーモント大学(University of Vermont: UVM)の日本語クラスの4年生との間で、異文化交流プロジェクトを行った。当該クラスのご担当はKazuko Suzuki先生である。スケジュールの都合上、UVMからの参加は受講生6名のクラスとなった。CUCの参加者は23名であり、人数差が非常に大きいことが、今回のプロジェクトの特殊事情である。

この特殊事情のため、UVMの学生1名とCUCの学生3、4名で1つのグループを作り(全体で6グループ)、原則として同じグループ内でやりとりを行うこととした。また、日米での人数差が大きいため、これまでのプロジェクトで実施していた異文化比較アンケート(Cultura, World Values Surveyなど)は行わなかった⁽⁴⁾。なお、日本側には7名の中国人留学生が含まれ、彼らの英語運用能力が全般に日本人学生に比べてかなり高いことから、1つのグループに中国人留学生が偏らないよう調整した⁽⁵⁾。

活動内容は、用意したFacebookのグループに、指定のテーマについて作成した動画を投稿し、投稿された動画についてコメントをやりとりするというシンプルなものである。コメントはテキストが中心であったが、写真や動画でのコメントも見られた。

テーマは、1回目が「自己紹介」(図1参照)、2回目が「学生生活」、3回目は自由とした。動画は「目標言語で話す」ことを主目的とし、母語での話も適宜加える形とした。コメントは母語も自由に使ってよいが、できるだけ目標言語を使うようにと指示した⁽⁶⁾。

日本側から見た交流スケジュールの概略は表1の通りである。秋学期の初めに、異文化間コミュニケーション能力に関わる基本概念の導入、本交流プロジェクトの目標と方法の説明、動画サンプルの提示、グループ分けとグループ内打ち合わせ、英文の準備などを行った上で、10月2週目(交流1週目)の授業時間を使って初回の動画作成(JP1)と投稿を行った。また、表1に示すとおり、日本側では、授業内にパートナークラスの投稿動画につい

(4) Jones & Yamauchi (2014), Yamauchi (2017)

(5) 参加者の英語力について補足しておく。春学期に授業で使用した教科書はWorld English (Cengage) のlevel 1である。中国人留学生だけでなく、日本人学生の一部にとっても文法事項は易しめに感じられるレベルであるが、同じ内容を「未習」として取り組む学生も多かった。発信面のタスクについては、理解できている学生でも訓練不足が観察され、語彙も不足気味であった。

(6) UVMの学生は動画をバイリンガルにしてくれた。CUC側では日本語を訳すことによる弊害を抑えるためにバイリンガルでという指示はしなかったが、後述のように、バイリンガルで動画作成を行うメリットも大きい。



図1「自己紹介」動画とそれに対するコメント

て内容理解やディスカッション、またコメントのやりとりも行った。授業時に行った1回目の撮影に際しては「目の前の相手に話しかける」ように、メモをただ読み上げるだけにならないことを心がけさせた。また、自信がないまま小さな声で早口になる方が癖のある発音より聞き取りにくいこと、聞き逃したり理解できなかった部分を確認しあうことは普通に起こることであり、ぜひそれも体験してほしい、といったアドバイスを与えている。

表1の「コメント可能な動画」欄から分かるように、同じ時期に、日本から6件(1グループ1件)、アメリカから6件(1人1件)の動画が投稿され、合計で12件のスレッドが作

表1 動画交流スケジュール

週	日本の動画 (投稿件数)	アメリカの動画 (投稿件数)	日本の 主な授業内活動	コメント可能な動画
1	JP1 (6)		動画 JP1 作成・投稿	JP1
2		US1 (6)	動画 US1 について	JP1, US1
3			動画 JP2 打ち合わせ	JP1, US1
4	JP2 (1)		(休講)	JP1, US1, JP2
5	JP2 (3)	US2 (6)	動画 US2 について	JP1, US1, JP2, US2
6	JP2 (1)		これまでの動画について	JP1, US1, JP2, US2
7	JP3 (11)		動画 JP3 作成・投稿	JP1, US1, JP2, US2, JP3
8	JP3 (5) JP2 (1)	US3 (3)	動画 US3 について	JP1, US1, JP2, US2, JP3, US3
9		US3 (3)	全体写真と最終コメント	JP1, US1, JP2, US2, JP3, US3

られることになる⁽⁷⁾。Facebook の仕様上、最新の動画だけではなくそれ以前の動画に始まるスレッドも、いわば「オープン」なまま表示され続ける。この方式の問題点は、どこに反応したらよいか、対象となる投稿を見つけにくくなる可能性があることだ。反応すべきスレッドを見落とさないよう、動画投稿時にはグループメンバーにタグ付けする方法をとった。また今回は、指定された課題動画からスレッドが始まるため、その動画投稿にリンクをはり Facebook 上の「ファイル」にそのリンク集を載せる等の工夫も行った。しかしグループで課題提出時期をずらす等、それ以外の面でも改善の余地が残る。

最後に、本プロジェクトの実施は、クラスメイトとの人間関係ができていた秋学期に実施した。グループワーク自体に慣れていたこともあり、どのような動画にするかについて打ち合わせをしたり、互いの英語を確認し合ったりすることに対する敷居はかなり低くなっていたと思われる。1 グループのメンバーは4人で、どのグループも1本あたり3～4分のグループ動画を作成した。お互いに質問し合う Q&A 方式で情報を出したり、タブレットで写真などを見せながら話したり、写真を挿入してナレーションを加える形を取り入れたりなど、様々な工夫が見られ、グループワークの形がきちんと機能したことがうかがえる (4.1 も参照)。

以上がプロジェクトの概要である。次節では、日本側の参加者に焦点をあて、プロジェクト前後でのオンライン異文化交流に関する意識の変化について論じる。

3. プロジェクト前後での意識の変化

本プロジェクト実施に先立って、春学期の段階で、オンラインでの異文化交流に対する意識調査を行っている。調査項目は次の6項目である。これらについて、「1. 全く当てはまらない」～「5. 非常に当てはまる」の5段階で答えてもらい、それぞれ1点～5点として加重平均を算出した。

- ①海外の人とのオンライン交流に興味がある
- ②英語でコミュニケーションをしたい
- ③海外の人たちと友達になりたい
- ④海外の人との交流に SNS を積極的に使いたい
- ⑤自分の英語 (会話) で意思疎通は十分できと思う
- ⑥自分の英語 (文章) で意思疎通は十分できと思う

今年度 (2017 年度) の結果を論じる前に、2016 年度に実施した同じ調査⁽⁸⁾について、2 回の調査のうち 1 回のみの回答者を除外した 16 名について、対応のある t 検定 (両側) を行った結果を示しておく (表 2)。2016 年度は、5 月と 12 月で変化が見られたのは項目①のみであった ($t(15) = 1.87, p < .05$)。

英語でのグループ動画作成および Facebook でのその共有は、2016 年度にも取り入れ

(7) 3 番目の動画については日本側も個人作成としたため、JP3 の件数が多くなっている。

(8) ただし、2016 年度については、5 月時点では項目②が含まれていない。

表2 オンライン異文化交流に関する意識の変化：2016年5月と12月

質問項目	5月 ($n = 16$)		12月 ($n = 16$)		t 値, $df = 15$
	平均	SD	平均	SD	
①海外の人とのオンライン交流に興味がある	3.38	0.93	3.88	0.60	1.87*
②英語でコミュニケーションをしたい	<i>n.d.</i>	<i>n.d.</i>	4.13	0.60	<i>n.d.</i>
③海外の人たちと友達になりたい	4.00	1.17	4.19	0.81	0.30
④海外の人との交流にSNSを積極的に使いたい	3.25	1.15	3.50	0.4	0.44
⑤自分の英語（会話）で意思疎通は十分できると思う	1.88	0.86	1.88	0.86	—
⑥自分の英語（文章）で意思疎通は十分できると思う	2.00	0.94	1.88	1.17	0.40

* $p < .05$

ていたが、2016年度の段階では、補足的ないし授業外の自主課題としての位置づけであった⁽⁹⁾。動画共有を主軸としてプロジェクトを構成したのは2017年度が初めての試みとなる。この新しく試みたプロジェクト構成が、参加者の意識の変化にどのような影響を与えたか（与えなかったか）、以下で確認していく。

まず、2017年春学期の調査結果を表3に示す。上で触れたように、2017年度のクラスでは、中国人留学生の英語能力が全般に高めであった。そこで、日本人と中国人を分けて集計し、等分散性を確認したのち t 検定（両側）を行ったところ、全6項目のうちの2項目、自分の英語力で十分意思疎通ができると思うかどうか（⑤⑥）について、日本人と中国人の間に有意差が見られた（⑤： $t(19) = 2.24$, $p < .05$ ；⑥： $t(19) = 3.08$, $p < .01$ ）。

表3 オンライン異文化交流に関する意識調査（2017年5月）

	日本人 ($n = 14$)		中国人 ($n = 7$)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
①海外の人とのオンライン交流に興味がある	3.57	1.12	4.00	0.76	0.87
②英語でコミュニケーションをしたい	4.21	0.86	4.14	0.99	0.16
③海外の人たちと友達になりたい	4.07	0.88	4.57	0.49	1.32
④海外の人との交流にSNSを積極的に使いたい	2.86	0.91	3.43	0.90	1.29
⑤自分の英語（会話）で意思疎通は十分できると思う	2.14	0.91	3.29	1.28	2.24*
⑥自分の英語（文章）で意思疎通は十分できると思う	2.14	0.99	3.43	0.49	3.08**

* $p < .05$, ** $p < .01$

2017年度の交流プロジェクトに関しては、日本人学生と中国人留学生との間にこうした特性の違いが見られることから、以下では日本人学生のみを対象として論を進めることにする。

表4は、日本人学生について、交流プロジェクト終了後の12月中旬に行った意識調査を5月時点の結果と比較したものである。日本人参加者のうち、片方のみに回答した者を除いた12名について対応のある t 検定を行ったところ、項目④（SNSを用いたオンライン交流への関心）と項目⑥（自分の英語力で文章での意思疎通が可能）の2項目について、5月と12月における回答が5%または1%水準で有意に異なっていた。また、統計的な有意差は認められないものの、項目⑤（自分の英語力で会話での意思疎通が可能）の変化も

(9) Yamauchi (2017)

無視できないと思われる。

表4 オンライン異文化交流に関する日本人学生の意識変化：2017年5月と12月

質問項目	5月 ($n = 12$)		12月 ($n = 12$)		t 値, $fd = 11$
	平均	SD	平均	SD	
①海外の人とのオンライン交流に興味がある	3.20	1.08	3.75	0.37	1.01
②英語でコミュニケーションをしたい	4.08	0.87	4.08	0.87	—
③海外の人たちと友達になりたい	4.00	0.91	4.50	0.50	1.50
④海外の人との交流にSNSを積極的に使いたい	2.75	0.92	3.50	1.12	3.06**
⑤自分の英語（会話）で意思疎通は十分できと思う	2.08	0.98	2.75	0.83	1.74 ($p = .054$)
⑥自分の英語（文章）で意思疎通は十分できと思う	2.08	1.04	2.75	0.92	1.95* ($p = .038$)

* $p < .05$, ** $p < .01$

2016年度（表2）と比べると、2017年度（表4）は、交流プロジェクト前後の自分の英語力についての意識の変化が大きいように見える。そこで、5月と12月の間に見られる変化の年度による違いについて、等分散性を確認したのち t 検定（両側）を行った。表5に示すように、項目⑤、⑥のいずれについても、5月時点では年度による有意な差は見られない。一方、12月の結果については、それぞれ有意水準1%、5%で、2017年度と2016年度の間に有意差が確認された（項目⑤： $t(25) = 2.31$, $p < .05$ ；項目⑥： $t(25) = 1.72$, $p < .05$ ）。

表5 自分の英語力に対する意識の変化：2017年と2016年

質問項目	時期	2017年 ($n = 12$)		2016年 ($n = 16$)		t 値, $fd = 25$
		平均	SD	平均	SD	
⑤自分の英語（会話）で意思疎通は十分できと思う	5月	2.08	0.96	1.88	0.86	0.35
	12月	2.75	0.83	1.88	0.86	2.31* ($p = .05$)
⑥自分の英語（文章）で意思疎通は十分できと思う	5月	2.08	1.03	2.00	0.94	0.41
	12月	2.75	0.93	1.88	1.17	1.72* ($p = .09$)

* $p < .05$

以上をまとめると、少なくとも事前事後の両方の調査に回答した日本人参加者については、2017年度の交流プロジェクトを経て、話し言葉、書き言葉のいずれについても、「自分の英語で十分に意思疎通ができる」と思えるように変化したと言える。このような意識の変化は、2016年度には見られなかったものであり、また交流に先立つ春学期の時点では年度による違いが見られないことから、2017年度に新たに取り入れた動画共有を主体とするタスクが、プラスに働いた可能性がある。

次節では、Facebookで動画共有を行うという活動が、どのように参加者の意識変化に影響したと考えられるか、動画共有というタスク自体の特性の考察と、2017年度の事後調査の結果をもとに論じていく。

4. Facebook での動画共有のメリット

上で確認したように、本プロジェクトで実施した動画共有およびそれに続くコメントのやりとりは、英語の習熟度が（一般的な程度に）低く、英語運用にも自信をもっていない大学生の意識を変えるのに役立ったと考えられる。では、このタスクのどのような点がどのように関与しうるのだろうか。ここでは、動画作成、その後のやりとり、動画視聴のそれぞれの段階別で考えられる影響を整理し、その上で、事後アンケートからの参加者の反応を考察する。

4.1 動画作成の段階

まず、動画作成段階に関わるメリットを見ていく。冒頭でも述べたように、非同時コミュニケーションでは、英文を準備する時間を確保でき、そのことが、特に英語で発信することに慣れていない学習者にとっては言語不安の軽減に役立つと考えられる。加えて、このプロジェクトでは、最初の2回の動画作成はグループワークとし、授業時間も使って英文の準備やチェックやグループでの打ち合わせを行えるようにした。また、その際に参考になりそうな動画や編集に使えるようなアプリを紹介したり、求めに応じて発音を含めた英語のアドバイスも与えている。

交流に限ったことではないが、実際のオーディエンスを想定した「作品」制作をタスクにすると、何度も練習し作品の質をあげようと努力する傾向がある。この傾向が今回のプロジェクトでも観察され、グループごとにオリジナリティあふれる工夫が見られた。例えば、自己紹介動画では、図2のように並んで順序に話した後、1人を質問者役とするQ&A方式のパートを追加したり、アプリを使って画面の人物にデコレーションを加えたものもあった。学生生活の動画では、図3のように、レポーターのように学祭の1シーンを撮影したグループや、図4のように全員で撮影した動画に、写真をつなげてナレーションをつけた動画を組み合わせるなど編集アプリを活用したグループもあった。動画としてはそれぞれ予想以上にいい出来であり、使っている英語は単純で間違いも含まれていたが、十分に理解できる作品になっており、映像による伝達のパワーを実感させられた。なお、グループ動画制作における様々な工夫が自然に起こるのは、彼らが使ったデバイスを使っていることも大きい。スマートフォンで動画を撮影するという行為自体がごく日常的な行為であるからこそ、それ以外の面で工夫する余力が生まれることを指摘しておきたい。



図2 自己紹介動画



図3 学生生活動画：学園祭



図4 学生生活動画：イントロ（左）；本編（右）

4.2 やりとりの段階

今回、動画共有に使ったFacebookもスマートフォン用のアプリがあり、動画共有とその後のやりとりが非常に容易に行える。また、自分に関わる投稿（タグ付けされた投稿）やコメント、反応（「いいね」）があれば通知され、自分の投稿が「見られた」かどうかグループ内でいつでも確認できる。このように、使いなれたデバイス上で、動画作成から、その後のやりとり、通知機能による反応の確認が行えることも、この動画共有タスクの利点だと考えられる。

コメントや反応が返ってくることで「通じた」という実感がもて、また、図5のように、



図5 Facebookでのやりとり

非常に簡単な英語でも、コメント欄でのやりとりが続けば「会話ができた」と感じることができる。逆に、英語の運用能力が高い参加者は、個人投稿になるコメントで、好きなだけ力を発揮することもできる。

ただし、スマートフォンには慣れていても、Facebook 自体に不慣れなために「グループ」の使い方が飲み込めていない参加者もあり、初期段階でもう少し丁寧な手順説明が必要だったと思われる。

4.3 動画視聴の段階

4.1で動画作成時に関わるメリットをあげたが、パートナーの動画を見る際も、撮影時と同様に非同時コミュニケーションならではのメリットがある。まず、投稿された動画はそこにずっと置かれるため、分かるまで時間をかけて、繰り返し見ることができる。分からないところは相手に聞き返すこともできる。授業時間も使ったので、特にミスコミュニケーションが生じていることに気づかないまま「理解できない」と思った時など、教員から助け舟を出すことも可能である。また、言語化されていない情報も多いという映像付きコミュニケーションの特徴もメリットになる。言語で説明されていない物も自由にピックアップして話題にすることができるため、会話を続けやすく、話も広がりやすい。

この2つの利点に分かる例として、一つのやりとりを紹介する(図6)。この例では、日本人学生(英語を非常に苦手としている)が、動画ではよく見えなかったペットに着目して「見たい」とリクエストしている。このように、映っているものなら何でもトピックにできるので、「何をコメントしていいか分からない」という事態におちいりにくいとも言える。さて、ここでこの学生は自力でなんとかコメントしたものの、ペットの名前と英語の動詞を間違えたためにミスコミュニケーションが起こってしまう。そこで事態の把握とその解決のための発話(I wanted to say...)に教員からの手助けが必要になったが、そ



図6 動画にちらりと映ったペットについてのやりとり

れが可能になるのも非同時コミュニケーションならではの。さらに、手助けが必要だったとは言え、このように実際のコミュニケーション場面で必要になったフレーズは、印象深く記憶に残りやすいということも期待できる。

また、注3で触れたように、UVMの学生は動画をバイリンガルで用意してくれた。やり方は、同じ内容の動画を日本語と英語でそれぞれ1本ずつ作る形(図7)と、1本の動画の前半は日本語、後半は同じ内容を英語で話す形があった。日英が完全に対応しているとは限らず、その必要もないが、日本語で内容が確認できることで、少なくとも概要は理解した上で、自分のレベルに応じて英語版の視聴に挑戦することが可能であった。内容を理解した動画を外国語で繰り返し観ることの学習効果の高さを考えると、バイリンガル動画の交換は今後ぜひ取り入れたい活動である。

最後に、ここまで述べた学習者にとってのメリットとはタイプが異なるが、繰り返し視聴できるという利点を活かし、パートナーの動画を授業内活動として視聴し、内容把握問題を追加課題としたり、異文化レポートの題材として用いることも可能である。この活用法については、実施前には思い足らず、プロジェクトが進んで動画が溜まってきて気づいたため、システムティックに取り入れるまでには至っていない。



図7 同じ内容を日本語と英語で投稿

4.4 事後アンケートからの考察

ここまで見てきたことを踏まえると、映像による伝達のパワーと非同時コミュニケーションの時間的特性が、発信時・受信時ともに、習熟度の低い英語学習者の交流活動への参加促進に大いに役立つと考えられる。本節では、この異文化交流そのものに関する事後アンケートをもとに、実際の参加者が動画共有による交流のどのような面をどうとらえたかについて、前述の異文化交流に関わる意識調査の結果（特に、自分の英語力に対する意識の変化）も合わせて考察していく。

まず、本実践での新しい試みである Facebook による動画共有に注目した2つの質問、「動画を利用したコミュニケーションに満足したか」および「Facebook を利用したコミュニケーションに満足したか」についての回答（「はい」・「いいえ」の二択）を見ると、いずれについても、「はい」が9名、「いいえ」が3名となっており、おおむね満足していると見てよいだろう。

コメント欄を確認すると、Facebook 利用についての不満は「使い方が分からなかった」ことが理由であり、動画利用についての不満の理由としては、自分の発音、準備（時間）の不足、動画撮影への抵抗感があげられていた。動画利用・Facebook 利用のいずれかに「不満」と答えた回答者（4名）について、自分の英語力に対する意識（前述の項目⑤および⑥）を合わせて、より詳細に見ておく。

【回答者 A】

- 動画利用の不満：もう少し聞きやすく、本場に近い発音にしたかった。
- Facebook 利用の不満：慣れるまで難しかった。
- 全般：初めて自分で多くのことを考え、話したり書いたりしたのがよかった。相手の

人達が接しやすく、もう少し自分が積極的に関わっていったらよかった。

- 会話での英語力への自信 (3): とっさではなく考えれば話せる感じ。
- 文章での英語力への自信 (3): 文の組み立ての知識がまだ足りない。

【回答者 B】

- 動画利用に不満: 何回も動画を撮ったが、やはり自分を撮ることは慣れない。
- Facebook 利用に不満: 使い方が分からなかった。
- 全般: 自分で英文を考えるのは大変だったがその分学べることも多かった。実際に海外の方と SNS を通じて話してみても伝わるうれしさを知ることができた。
- 会話での英語力への自信 (3)
- 文章での英語力への自信 (3)

【回答者 C】

- Facebook 利用に不満: 使い方が分からなかった。
- 動画利用 (満足): 文章より動画のほうがわかりやすくコメントもしやすかった。
- 全般: 自分の発言は簡単なもので短かったけどそこから何回か会話が続いてよかった。LINE なら使いやすく交流したいかも。
- 会話での英語力への自信 (3): 通じるときも通じないときもある。
- 文章での英語力への自信 (2): 文章では微妙だと思う。文法が不安だ。

【回答者 D】

- 動画利用に不満: しっかり頭に入れてから落ち着いて話したかった。
- 全般: まだまだ英語ができないと実感した。もともと英語ができてなくて人より遅れてる分焦ってしまう。昔より理解できる単語も増えてきたと今回のプロジェクトで実感した。
- 会話での英語力への自信 (1)
- 文章での英語力への自信 (1)

回答者 A～C は、いずれも会話では自分の英語で意思疎通ができることもある（できないこともある）と自己認識している（回答では「3」）。会話とくらべて、文章の場合は文法の力が不足している（回答者 A, B）というのも妥当な認識だと言える。言い換えれば、彼らには「過度な」苦手感や自信のなさが見られない。発音がもっとよければと感じたり（回答者 A）、動画撮影に抵抗があったとしても（回答者 B）、グループ課題としてこなす必要上、英語で実際の相手を想定して表現する経験や、その後のやりとりで実際に「伝わった」体験はできている（下線部）。この経験が、過度な苦手感や自信のなさを払拭するのに役立ったと考えられる。なお、回答者 D は自分の会話・文章での英語力について「1」と答えており（全体で「1」と回答したのはこの回答者のみである）、まだ苦手感が強い。それでもやりとりの中で「理解できる」体験はできたようであり、今後の学習に期待したい。

その他の回答者は、動画利用・Facebook 利用ともに満足しており、英語意識については「2」～「4」と答えている。彼らのコメントも含めて、動画利用に関するものをピック

アップすると、そのメリットとして、内容の面白さや分かりやすさ (A, B, C), 生の英語に触れる機会 (D), 臨場感・親近感 (D), 自分の発音の練習機会 (F, G), 非同時性 (H) があげられる。

- A. おもしろかった。相手についてもよく知れた。
- B. 動画を見るのも撮るのも楽しかった。
- C. 文章より動画のほうがわかりやすくコメントもしやすかった。
- D. 本場の英語を聞いたこと。
- E. 相手から直接英語を学んでいる感覚で学習できた。
- F. 発音の練習になった。
- G. 初めての経験だったがうまくできたと思う。声の大きさと発音をもっと意識していきたい。
- H. リアルタイムで話さないのでリラックスできた。

今回は交流の性質 (2 節を参照) もあって、文化理解に関しては、実際の異文化接触体験から刺激を受けたという浅いレベルにとどまっている。自由記述全体を見渡すと、以下に紹介するように、英語でのやりとりや、自分の英語力に言及したものが多い。

- オンライン交流で本場の英語を勉強できてよかった。
- 返信をしてさらに英語の理解が深まった。
- 学ぶ前よりも英語の単語を覚えられて、楽しく学ぶことができてよかった。
- 自分で英文を考えるのは大変でしたがその分学べることも多かった。
- 初めて自分で多くのことを考え、話したり書いたりしたのでいい経験になった。
- 簡単な英語でもいいから話そうという意識を持って取り組んだ。
- まだまだ英語ができないと実感した。もともと英語ができてなくて人より遅れている分焦ってしまう。昔より理解できる単語も増えてきたと今回のプロジェクトで実感した。
- もっと本場に近 [い言い方で], すぐ言葉が出てくるようボキャブラリーを増やしたいと思った。
- もう少し聞きやすく、本場に近い発音にしたいと思いました。
- 英語で話すのに興味が出てきた気がする。
- コメントなどで交流を深められたことが好かった。
- 自分が言ったことに対して反応してもらえると嬉しかった。
- 実際に海外の方と SNS を通じて話してみても伝わるうれしさを知ることができた。
- 交流してお互いの情報を共有できたのは良かったが、もっと自分が話せたらと思った。
- 自分の発言は簡単なもので短かったけどそこから何回か会話が続いてよかった。相手が会話を続けようと質問をたくさんしてくれて助かった。
- とても有意義な体験だったと思う。ビデオを送りあって相手の文化について知ることができたし。自分の英語力も上がったと思う。

ン能力に自信がない者でも、受信・発信に積極的に関与しうる。

●臨場感・親近感

テキストのみのやり取りに比べて、話し手の「私・いま・ここ」が映像とともに伝達されることにより臨場感を味わいやすい。また、表情や話し方、しぐさなどが伝わることにより親近感もいただきやすい。そのことが、活動への参加意欲の向上にもつながる。また、実際のオーディエンスを想定した発信は、練習という語学の基本となる活動を自然に促進する。

●非同時的コミュニケーション

上記の利点はビデオ通話でも確認されているが、今回の動画共有の形式は、ビデオ通話とは違って非同時的なコミュニケーションである分、緊張感や不安感が起こりにくい。また、英語の受信・発信において必要な分だけ時間をかけることができる。保存された動画は、理解した内容を繰り返し英語で見るためのオーセンティックな教材にもなる。この利点を活かすためにも、バイリンガルでの動画作成を今後は取り入れていきたい。

●動画作成・共有自体の容易さ

スマートフォンという使い慣れたデバイスで、動画撮影や編集が簡単に行え、Facebook アプリを利用して、共有やコメントのやりとりも行いやすい。こうした操作自体が容易である分、作成する動画の中身の方にリソースをさくことができる。

●コメントのやりとり

Facebook では自分に関わる投稿やコメント、反応（「いいね」）があれば通知され、交流活動の継続を動機づける「反応」を確認しやすい。コメントがあることで「伝わった」ことが実感できるだけでなく、保存されるコメントのやりとりを見直して、自分の発信がどの程度伝わったか確認したり、ミスコミュニケーションを解決するといったオーセンティックな活動を、時間をかけて行える。

授業の一環としてこのような活動を行うことで、必要な学習支援を提供しやすくなるという点も、英語習熟度の低い学習者にとっては重要であろう。この交流活動は、オーセンティックなコミュニケーションの経験とオーセンティックな「教材」の利用を、支援可能な状態で提供できる学習形態と見ることもできる。

クローズドな交流の場を容易に設置できることもあって、Facebook グループを利用したが、Facebook を使い慣れていない学習者の中には「グループ」の使い方をよく飲み込めていない者も見られた。また、反応すべき投稿の数が多すぎるという事態（2節）を避けつつ活発なやりとりが行えるよう、交流のスケジューリングも含めて、Facebook 利用には改善の余地が残されている。

5. おわりに

本稿では、同時コミュニケーションの難点を避けつつ映像付きコミュニケーションの利点を活かすべく、動画共有をとりいれた2017年度の日米異文化交流プロジェクトの実践について考察した。テキスト（＋写真）ベースのコミュニケーションを主体とした2016年度のプロジェクト（付随的に動画共有も加えた）の参加者と比較した時、2017年度の

プロジェクトの参加者には自分の英語力の捉え方に大きな変化が見られ、交流プロジェクトを経て「過度な」苦手意識が払拭されたことがうかがえた。動画共有を主体とした交流活動のプロセスの考察と事後アンケートの結果をふまえて、映像付きの非同時コミュニケーションが、英語の習熟度の低い学習者についても、その交流活動への参加促進につながりうることを論じた。

本交流プロジェクトの参加者の英語の習熟度は、非英語専攻の大学生としてはごく一般的な程度である。「英語で話すのは無理」という過度な自信のなさ、英語でのコミュニケーションの経験の絶対的な不足という要因が大きいことから、本プロジェクトにおいてコミュニケーション活動に関与し、経験をつんだことで「自分の英語（会話・文章）で意思疎通は十分できる」という方向に意識が変わってきたと考えられる。今後、実際に英語でのコミュニケーション機会をつかまえ、自分の英語を試し、学び続けるかどうかは学習者次第である。

なお、本稿では交流参加者のうち中国人留学生についてまったく考察を加えていないが、彼らがクラスメイトであることのプラスの影響も考慮する必要がある。1/3を占める留学生の存在のおかげで、クラス内で英語や中国語が飛び交うことが自然になっており、このクラス環境もこれまでとは全く異なっているからだ。

最後に、本プロジェクトで使用したFacebookグループは“Tandem Learning”と銘打ってはいるものの、「言語交換」の要素をプログラム化するまでには至らなかった。動画交換を「課題」として課すことを中心とした「クラス間」交流において、どこまでTandem的な要素を組み込めるかは、今後の課題としたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP15K02758の助成を受けたものである。

〔参考文献〕

- Akiyama, Y. (2015). Task-based investigation of learner perceptions: Affordances of video-based eTandem learning. In E. Dixon & M. Thomas (Eds.), *Researching language learner interaction online: From social media to MOOCs*. CALICO Monograph Series Volume, 13, pp.149-170. San Marcos, TX: CALICO. Available from: https://www.researchgate.net/publication/289999815_Task-based_investigation_of_learner_perceptions_Affordances_of_video-based_eTandem_learning (閲覧日: 2017. 12. 28)
- Godwin-Jones, R. (2013). Integrating intercultural competence into language learning through technology. *Language Learning & Technology*, 17 (2), 1-11. Available from: <http://llt.msu.edu/issues/june2013/emerging.pdf> (閲覧日: 2018. 1. 10)
- Intercultural Video Exchange. <https://interculturalvideoexchange.com/> (2018. 1. 15)
- ユーザーローカル テキストマイニングツール. <http://textmining.userlocal.jp/> (閲覧日: 2018. 1. 15)
- Jones, M. & Ymauchi, M. (2014) Intercultural Exchange via Moodle. *MoodleProceedings*

of Association of Japan Annual Conference 2017, 54-57

山内真理. (2014) オンライン異文化交流の事例研究. 千葉商大紀要, 51 (2), 261-274.

Yamauchi, M. (2017). How VE can help prepare Japanese students for intercultural communication. Presented at EuroCALL 2017, 2017. 8. 2, Southampton.

Yashima, T.& Zenuk-Nishide, L. (2004) The Influence of Attitudes and Affect on Willingness to Communicate and Second Language Communication Language Learning, 54 (1), 119-152.

(2018.1.30 受稿, 2018.2.26 受理)

〔抄 録〕

異文化交流におけるビデオ通話活用の大きな利点として、映像付き同時コミュニケーションにより、パラ言語・非言語情報を含む臨場感ある伝達が可能になることがあげられる。これにより、言語の壁を超えて、好奇心をかきたてる印象深いコミュニケーション活動が可能になるが、同時コミュニケーションという形態は、発話のための準備時間や相手の発言を処理する時間がとりにくく、言語力に自信のない参加者にとっては障壁にもなる。また、相手国との時差によっては、そもそも同時コミュニケーションを授業内に取り入れることができない。

映像付きコミュニケーションの利点を活かしつつ、同時コミュニケーションの難点を避けるべく、2017年度の日米交流プロジェクトでは、それぞれのサイドで撮影した動画の共有をベースとした映像付き非同時コミュニケーションの形を取り入れた。テキスト（＋写真）ベースのコミュニケーションを主体とした2016年度のプロジェクトの参加者と比較した時、2017年度のプロジェクトの参加者には自分の英語力の捉え方に大きな変化が見られ、交流プロジェクトを経て「過度な」苦手意識が払拭されたことがうかがえた。動画共有を主体とした交流活動のプロセスの考察と事後アンケートの結果をふまえて、映像付きの非同時コミュニケーションが、英語の習熟度の低い学習者についても、その交流活動への参加促進につながりうることを論じていく。